

19. 出版業における戦略と展望

「出版(業)の今、変わるものと変わらないもの」

～著作物のデジタル化時代に～

みすず書房

持谷 寿夫

1. 出版（業）を考える

・出版（業）という営み

出版の企業理念とは／出版の産業分類は—製造業？ 情報産業？ サービス業？
著作権法からみた出版業—出版権／マーケティング不要の世界(だった)

・みすず書房という出版社

1946年創業—創業時の理念の継承／ 人文書とは—3つの要素=越境、個性、普遍性
ロングセラーを基盤とした経営—代表的な『夜と霧』

・出版物の商品特性

価値の客観性が少ない／代替がきかない／事前の要求内容を把握できない
反復購入がない／ブランドサイクルが短い／価格弾力性が低い
かたちが内容を規定しはじめた—ペーパー・バックが変えた出版の世界

・出版物—「情報」と「知識」

情報は置きかえられ、知はストックされる／出会いの場の確保の切実な願い

2. 読書を取り巻く構造の変化

・進展するデジタル化、ネットワーク化社会

生産と流通のコストダウンと効率化—孕む矛盾／均一化する質／閉から開へ

・変容する読書の世界(社会構造とライフスタイルの変化)

少子化はいうまでもなく／かたちなきメディアの隆盛とともに—電子書籍は福音か
必要とされない内容や質への評価—書評の権威の衰退
エンターテインメントは柔軟に変化する、では一般教養書は

・ネット時代のなかで

日常のなかで、「本」と出会う場所—書店、図書館、学校、家庭、さらに
(大型書店・チェーン店・個性ある書店・複合型の書店・地域(街)の書店・ネット書店)

3. 出版業界の変化と課題

- ・雑誌(大量流通)で書籍(少部数多品種)を支える構造のゆらぎ
既存流通(低コスト)構造のゆらぎ／注文流通は高コスト
- ・大量流通を保証する制度（再販制・委託販売）の硬直化
在る(送られてくる)ものに依存する体質の結果は
- ・デジタル化とシステム化の光と影
ワークフローが変わった／制作面でのコスト削減／流通の効率化／固定化する分類
排除される売れない
- ・進む多品種少量
既刊書から新刊書—求められる短期間での決着
- ・編集主導企画の限界
川上～川下という言葉は過去のこと
- ・確立されない出版者の権利
出版者の権利は必要か
- ・批評する力の衰退
失われた(必要とされない)確かな「尺度」
- ・ペーパー・バック革命の行き着く果て
80年代の文庫→90年代の新書

4. 出版界と図書館

- ・大学図書館
研究(学術書)と教育(教科書)、大学というステージのなかで、学術情報の担い手としての
専門書系出版社の役割
- ・公共図書館
増える公共図書館数と市場への影響／文芸系出版社や著者からの批判／
少部数出版物からの期待／市民価値の向上とはなにか
- ・学校図書館
児童書出版界との緊密な関係

*メディア多様化の時代、それぞれの図書館はなにを蔵書しようとするのか

5. 「電子書籍」

- ・そもそも「電子書籍」とは
「紙」→「電子書籍」—創作の原点は、不自由な版面をイメージすることからはじまる
頁をめくり目で見えて読む行為が、読書だった→「電子」もあるし「音」もある
- ・いわゆる B to B モデルと B to C モデル
- ・緊急デジタル化推進事業に関与してみえてきたもの
形成されない市場—電子書店、端末、リーディングシステム、＜見つけにくさ＞
コストと著作権処理、印税処理

- ・それでも、機は今—電子書籍と図書館
求めるのはアーカイブ？図書？

6. デジタル化時代の連携の必然と可能性

- ・出版界と図書館界
支え、伝える存在としての両者／著作者や流通関係者
- ・他業態との共同

7. これからの出版業の向かう先—戦略はあるか

- ・変わらないものへのこだわりと、機敏な変化への対応
出版社だからこそできることとはなにか—編集力、プロデュース力

8. 出版社の私が思う図書館員の専門性とは

「本」を選ぶ積極性、選ばない積極性／嗅覚—「本」のどこをみるか。新聞から得られる情報の数々／発信—SNS ばかりではなく／話すことをいとわない—営業職ではないが／出入りの書店と仲良く—入ってくる情報は千差万別でヒントは多数／外に行く—本屋さんでやっていることの数々

9. 終わりに

- ・「本」はあまりにも人間的なメディア
人が関わり、場が用意されるとき、「本」は伝えられていく。
- ・電子になり、版面という束縛から解放されるときに伝えられる可能性